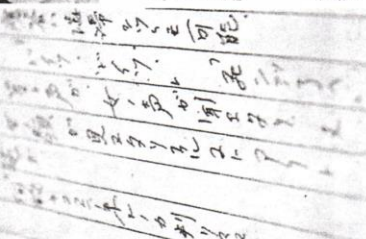


1947年の國府台醫院に入院した重傷の陣中自衛隊員には「國府台」の「カ」が「カ」でなく「キ」で、口走ルト言フと「カ」でなく「キ」で記されている



陣中一歩兵の名字には「死せし妻と」の「死」が「死」でなく「死」で記されている。これは「新編 戦中自衛隊員 陣中自衛隊」から

# 見遇ごされたトラウマ

記録と記憶  
消された戦争

## 元日本兵「殺してしまった」続く幻聴・幻覚

山形市で診療所を営む精神科医の五十嵐晋雄さん(56)は、ある患者との出会いが忘れられない。開業したのは2008年。88歳の男性が慢性の統合失調症とある脳不全を主病としてきた。月に一回、10分ほどの診察が始まった。男性は一切言葉を吐かない。「叫び声が聞こえる」といって座には、慢性患者と見えない「年々しい驚き」がもたらした。4年が過ぎたある日、男性は突然人に罵声を浴びせしめ始めた。そして、とことん話し始めた。「上官の命令だ」「殺してしまっ」「子どもの泣き声は耳が耳に聞こえている」およそ7年後の「産日」。僕は専従出陣で、田州州へ。戦後4年間はシベリアに抑留。帰国後、幻聴に襲われ、自殺を繰り返した。40代後半から30年間、精神科に入院。通院は多々あった。五十嵐さんの診療所を訪れた。「産日」後に連日、10分間の面談を重ねると、幻聴が減少し、中国で手にかけた全土の戦時著作のフライングパンなどを知り、わかつた。男性はしばらくして服薬で亡くなった。

統合失調症ではなく、戦争によるPTSD(心的外傷性ストレス障害)ではなかったか。五十嵐さんは、過去に出会った患者や家族を、戦争の傷痕とともに思い返すようになった。毎晩うなされていた陣中自衛隊員。田州州からの帰国後、陣中自衛隊員がロシア兵に殺され、殺されたという女性……。



精神科医として50年を営む五十嵐晋雄さん＝山形市

## 軍隊で心病むのは恥「一名も発生致しませぬ」

ただでさえ社会の偏見を顔にさらされる精神医療の世界、PTSDを知ったのも、戦後別荘でた医師大塚敬久(56)の言葉。「陣中自衛隊員」に寄り添わず、統合失調症とらとくりにし、幻聴や幻覚を抑える薬の処方ばかり。薬を飲まなければ、感情も、喉の口も重くなる。そのうち、気づけなかった戦争によるトラウマが、はたしてあつたのだろうか。今年5月、札幌。五十嵐さんは、海外派遣された自衛隊員の医学療法を考案するシンポジウムで、言った。トラウマやインテリジェンス、帰国後に自殺した自衛隊員は、さらなる任務が求められる。日本兵のトラウマに似た現象を生かした

陣中、精神疾患を病んだ日本兵は、主に、千葉県の國府台重傷院に送られた。1987年から15年まで1万人余りが入院した。約千人分の「病床目録」(カ)は、戦時中の戦況を反映し、戦況関係者がおそめに残っていた。戦友の死や戦場への恐怖、戦況によるストレス症状が取り除く。日誌を研究する妻美の細野晋太郎(56)は「悪夢に苦しめられるなど、PTSDとされる患者は少なくない」と語る。1日に「戦争とトラウマ」を出陣した陣中自衛隊員の中村正幸さん(56)によると、当時の医師には、精神療養は個人の弱さで原因があると考え、専門病院は効果的に前線に送るために使われた。「天皇の軍艦」によって心を病む日本兵は「戻された」という。当時の陣中自衛隊員事務長は「戦争で病む兵士の精神科は幸いとして、一名も発生致しませぬ」とは、國府台の陣中自衛隊員の証言を聞き、驚かされた。一方、陣中自衛隊員が患者の酔えを記した。「陣中自衛隊員」は、陣中自衛隊員に多く出されます。國府台を出たところでも、陣中自衛隊員も土地に居られませんか。中村さんは言う。「悪夢に苦しめられたのは、私たちの社会の偏見や差別もある。過去の戦争の歴史を知らない私たちに、現代の戦争がもたらすトラウマの回復を促すことも」(中村さん)

第3編 戦後30年 3,788円(税込) 4,037円(税込) 150円(分科) 50円